

マスターズを彩るレジェンドたち(14)

長月。秋立つ9月は露を結ぶようになる7日の白露が過ぎ、10日の二百二十日が穏やかに過ぎれば、20日は敬老の日。23日は秋分の日で彼岸の中日だ。コロナ騒ぎのなか、豊年の秋を願いつつ、1日も早くマスターズ陸上が行われる日が訪れることを期待して。今月もマスターズ陸上を彩った人の紹介を。大阪の井指康裕さんと長崎の倉津緑さんの活躍の軌道をつづった。

写真／井指康裕さん、倉津緑さん

井指康裕さん(54歳・大阪)
短距離を軸に頑張る
“マルチ”アスリート

「いやあ、和歌山大会で西田賞をいただいたときは、本当にうれしかった」と井指康裕さん。現在、54歳の井指さんが男子優秀選手の西田賞に輝いたのは、2017(平成29)年にマスターズ陸上の発祥地、和歌山市の紀三井寺競技場で開催された国際・第38回全日本マスターズ陸上の選手権大会だ。

井指さんは同大会のとき、50歳。M50・100mに11秒86(−1.0)、200mが23秒86(−0.7)の日本新で二冠を獲得した。これが評価されての西田賞だ。井指さんは開催地の和歌山県出身。西田賞に大喜びしたのは、井指さんの母校・桐蔭校は、故・西田修平さんの出身校でもあるからだ。

西田さんは日本マスターズの第2代会長であり、かつての棒高跳の名手でもある。1932年ロサンゼルス、36年ベルリン両五輪で銀メダリストに輝き、特にベルリン大会では3位の大江季雄選手のメダルをつなぎ合わせた“友情のメダル”として、有名な“伝説の主”なのだ。

井指さんは「西田さんは尊敬する母校の大先輩です。私が出身地・和歌山で名誉な西田賞を最年少受賞できたことは、先輩(西田さん)が力を貸してくれたのでは」と話した。井指さんの喜びは単なる受賞の喜びとは違い、感激を伴うものだったのだ。

M50クラスになった井指さんは「200mで日本新を出す」ことが目標だったが、達成できないまま和歌山大会を迎えた。そこで和歌山大会の1週

間前にコーナー走を交えた練習をして、動きに修正を加え本番に備えた。そのかいあって、向かい風はあったがコーナー走も練習どおりにうまく走ることができ、好記録に結び付いた。

23秒91の日本記録を20年ぶりに破った井指さん。思い出深い和歌山大会のほか、同じ2017年9月に中国のルガオであった第20回アジアマスターズ陸上も印象に残る大会だ。井指さんは100m12秒00、200m24秒32、走幅跳5m50と3種目を制覇。「ルガオは長寿の街といわれ、趣がありました。ただ、競技は雨が降って、サブトラックで決勝をやったりと大変でした」。

残念だったのは40歳のとき、イタリアのリッチオーネであった第17回世界マスターズ陸上。M40・100m、200mで1次予選、2次予選を突破。準決勝へ進んだのはよかったが、ここでレース中に左脚の太ももに肉離れを起こした。「肉離れがなかったら、決勝で入賞していたかも」と話す。

また、1次予選が19時、2次予選が21時で、予選が夜からという、珍しい経験もした。さらに、400mHでは「ハードルをまたいでいく選手がいて、マスターズ陸上のよさ、楽しさを見学させてもらった」とも。

井指さんは桐蔭高で学んだ後、北海道大薬学部へ。北海道大院まで進み、薬学博士号を得た。陸上は高校時代から取り組み、北大のときには1990年に100m10秒4(手動・日本ランク3位タイ)、10秒66を出した。インカレ、日本選手権や国体の経験もあり、北大では5年間、陸上部の監督も務めた。

高1のときには練習で、「鴻池清司



日本新で二冠し、西田賞を獲得した井指さん

日マ会長の練習する姿をよく見受けた」と懐かしむ。マスターズ陸上には1999年にセミ・マスターズ(SM)30が加えられた年に入会。この年に32歳の井指さんは、100m11秒24、200m22秒74でいずれも国内マスターズでランク1位だった。

学術面だけでなく、マスターズ陸上でも多才な面を見せ、各種目で活躍している。2007年の第28回国際・全日本マスターズ陸上のときは40歳。M40・100m11秒34(+1.7)、200m23秒34(+0.7)と得意種目のほか、400mでも52秒20と1位に。

ほかの大会でも100mと200mの1位とは別に、やり投でトップに立ったこともある。また、「マスターズ陸上は得意種目だけでなく、いろいろな種目をやることの楽しさがある」と、地元大阪で混成競技の全日本選手権があった頃(1990～2004年)には、十種競技で優勝した経験も持つ。

混成競技では2003年のSM35・日本記録は井指さん(36歳)の5900点。次年は6002点に上げた。38歳になると五種競技で3144点の日本記録をつ



くった。北大大学院を卒業後、一流企業に就職。だが早期退職して、現在は陸上クラブの理事として陸上の指導に専念している。

クラブとは別に住んでいる大阪府羽曳野市の周辺で小・中学生を対象に、陸上の指導に当たるなど、日々“陸上三昧”の生活だ。2022年で55歳とM55クラスへ。「コロナ騒ぎが終結し、マスターズ陸上が開ける日を」願いつつ「でも、50歳代になると思わぬ故障も。ケガに対応しながらの(陸上も)大変ですが」と笑いながら語る。

倉津緑さん(82歳・長崎) 8月1日にW80・走幅跳で 2m94の日本新をマーク

8月中旬に大雨に見舞われた北九州地方。長崎県五島列島の中通島に住む倉津緑さん。毎日降り続く雨にうんざりだったが、8月16日の夜、ふと空を見上げると「何ときれいな」と思える星が輝いていたようだ。雨のわずかなすきまを狙ったような星空だった。

夜空の星の輝きを見上げ、少しの間だったがくつろいだ倉津さん。ふと、8月1日に諫早市であった長崎マスターズ陸上を思い返していた。現在、82歳の倉津さんはW80・走幅跳に出て、2m94の日本新を出した。三段跳は6m08で日本記録の6m19に11(cm)届かなかった。「2019年の群馬での全日本マスターズ陸上以来の大会出場で、跳ぶ練習は1回もしてなかったのだ」と、20mの助走で「足が踏切板に乗るだろうか」と不安はあったが、何とか跳べた。走幅跳のW80クラスの日本記録は2m87で、倉津さんは2年ぶりに7cm更新した。「跳躍の練習は2年間もしてなくて、ただ朝・夕に近くの砂浜を600mぐらい2往復していました」と倉津さん。

41歳でマスターズ陸上の仲間入りをした倉津さんは、有川中の3年生のとき、体育の先生に言われるまま陸上と、9人制バレーボールを始めた。陸上では走幅跳で、長崎県大会では5m05を跳んでトップへ。中学を卒業

後は、自宅近くの個人の医院へ住み込みで勤めた。

正月の元日以外は休みなし。だが倉津さんは中学時代に身につけた運動が忘れられず、早朝に砂浜を走ったり、近所の小・中学校に行き鉄棒で腕などを鍛えた。通っていた有川中は大相撲の横綱・佐田の山を出し、倉津さんが勤める浜崎医院の院長が後援会長だった。

もう1人、有川中から上五島高一日大―日大大学院を出て400mで鳴らし、2000年シドニー五輪の400mと4×400mRに出た田端健児(五輪出場時はミズノ)が出ている。倉津さんはシドニーまで仲間と応援に行った。

中学生の頃の倉津さんは練習するとき、ハダシのまま。走幅跳の練習では母親が針仕事をするときの裁縫台で切ってくれた、その切れ端を踏切板のかわりに土に埋めて、踏切を繰り返したという。勤めと練習の合い間に通信教育で看護の免許を取った倉津さんは、かなりの努力家だ。

22か23歳のとき、朝・夕の練習が実り、1961年の第10回全国青年大会で東京の旧・国立競技場へ。「初めての“花のお江戸”はさすが」と思ったうえ、国立競技場の立派さには「脚が震えた」という。成績は走幅跳で4m91を跳び3位に食い込んだ。

話は変わってマスターズ陸上へ。全日本マスターズ(当時は全日本中高齢者)陸上の第2回山梨大会に初参加した。当時の女子はリレーを含み8種目だけが実施され、42歳の倉津さんはW40・100mと「生まれて初めて走った」という800m、走幅跳に出場した。

100mは14秒2(+1.2)、800mが2分58秒9、走幅跳で4m33(-1.4)と3種目すべて2位、100mは大会新だった。翌1982(昭和57)年の第3回東京大会にも参加。初上京のとき、びっくりした旧・国立競技場に懐かしさを感じながら、W40・100m14秒20(+0.3)で3位、800m2分58秒4で4位、走幅跳4m54(+1.1)で

1位の成績を収めた。

走幅跳は倉津さんの地元長崎県であった第4回大会も頑張り、44歳になっていたがW40・走幅跳4m45(±0.0)で連勝したのははじめ、100m14秒1(+0.9)で2位、走高跳は1位と同記録の1m25で2位、と上位を占めた。1年後の第5回沖縄大会は「第5回記念」として行われた。

45歳になった倉津さんはW45クラスとなり、100m14秒2(+1.0)、200m29秒0(+3.0)と短距離2種目で優勝。さらに、走幅跳4m27(+0.6)で2位だった。このうち200mは沖縄大会から実施されたのだが「何の練習もしないまま200mの距離をこなしたら勝ってしまった」と倉津さん。

現在、得意としている三段跳は「50歳から」。現行のマスターズ陸上の倉津さんの日本記録は、W70・走幅跳3m99(70歳、2009年)、三段跳8m64(71歳、2010年)、W75・三段跳7m39(75歳、2014年)となる。

女子優秀選手(青木賞)に選ばれたのが2004年に鹿児島県で開かれた第25回全日本マスターズ陸上のときで倉津さんは65歳。W65・走幅跳で3m90(+0.5)、三段跳が8m63(-0.2)のそれぞれ日本記録をマークして優勝したことが評価されたのだ。

朝5時に起床する倉津さんの日課は「自宅の墓と知り合いだった人たちのお墓参り。後は近くの美しい海の景色を眺めながら、左右の脚でけんけん跳びを。練習のつもりで」と笑う。最後に口にした言葉は「早くコロナが収まり、全日本マスターズ陸上の大会が開かれることを願っています」だった。